我が国における生涯学習普及の動向と研究課題
－「生涯学習に関する世論調査」の経年分析－

白　木　　賢　信
（東京家政大学）

1.　はじめに

我が国における生涯学習普及についてはさまざまな捉え方があるが，これまでに各自治体や全国規模で実施されてきた成人対象の生涯学習調査では，主に次の3項目に関する実態を継続的に捉えてきている。その第1は「生涯学習」という言葉をどのくらいの成人が聞いたことがあるのかという「生涯学習」の周知率で，第2は生涯学習に関する活動を実際にどのくらいの成人が行っているのかという学習率，第3はどのくらいの成人が今後の学習活動を希望しているのかという学習希望率である。もちろんこれらの実態だけで生涯学習普及の全てを捉えられるわけではないし，最近の生涯学習調査では新たな調査項目を設け，さまざまな観点から生涯学習普及の実態を捉えている。しかし今回は，生涯学習普及の動向を摑むことを目的の1つとしているため，その分析に耐えられるだけの調査データを有している上記3項目に絞ることにしたいと思う。

上述のように問題を限定した上で，本稿では，我が国における生涯学習普及の動向についての分析結果を提示し，あわせて今後の研究課題についての検討結果も提示することにしたい。この分析にあたっては，今回は，昭和63年

（以下，S63），平成４年（以下，H４），平成11年（以下，H11），平成17年（以下，H17），平成20年（以下，H20）に内閣府（平成13年以前は総理府）が行った『生涯学習に関する世論調査』の調査結果の分析を行うことにし，必要に応じて昭和54年（以下，S54）に実施された『生涯教育に関する世論調査』の結果も一部用いることにする(1)。また，生涯学習普及は年齢あるいは世代ごとに特徴が分かれるのではないかと予想されることから，特に今回は年齢別および世代別の分析を中心に行うことにし，その他の観点からの分析は今後の課題にしたいと思う。

なお，直近のH20を除く『生涯学習に関する世論調査』の結果分析，あるいは各自治体で行われた過去の生涯学習調査の結果分析については，これまで主に浅井経子が研究を重ねてきているので(2)，次章以降ではそれらの研究成果についてもあわせて述べていくことにしたい。

2.　生涯学習普及の動向

前章で述べたように，本稿では生涯学習普及の動向を捉えるため，「生涯学習」の周知率，学習率，学習希望率の３項目を取り上げることにした。まずここでは，それぞれについての成人全体および年齢別の経年変化について，先行研究を提示しながら述べていくことにしよう。

（１）「生涯学習」の周知率の経年変化

ここでいう「生涯学習」の周知率は，「生涯学習」という言葉を聞いたことのある人の比率で捉えている。S63では質問の仕方が異なり，「生涯学習または生涯教育」という言葉を聞いたことがある人の比率である。成人全体では，S63の６割足らずからH17，H20には８割以上に達している（第１表参照）。

年齢別では，S63では最も周知率の高い年齢が30歳代であったが，H４以降は40歳代が最も高くなっている。逆に最も周知率の低い年齢については，S63では70歳以上であったが，H20では20歳代が最も周知率が低くなっている。但し，年齢による周知率の差はこの20年間で縮まってきており，S63では年齢によっては30％台から60％台まであったところ，H20ではどの年齢も

第1表　年齢別にみた「生涯学習」の周知率の経年変化

	S63	H4	H11	H17	H20	S63～H20間の比率の増減
全体	58.0	64.5	74.0	80.7	80.5	＋22．5
20歳代	55.0	55.6	60.6	72.3	70.2	＋15．2
30歳代	62.4	67.1	76.7	81.0	80.7	＋18．3
40歳代	60.7	69.9	84.6	89.0	89.2	＋28．5
50歳代	57.2	69.1	79.2	87.5	84.8	＋27．6
60歳代	59.6	62.4	74.2	81.5	81.4	＋21．8
70歳以上	38.8	51.5	60.6	67.9	72.6	＋33．8

(注) 表中の数値は被調査者数を母数とした比率。なお，各調査における「生涯学習」の周知率の捉え方は次の通り。

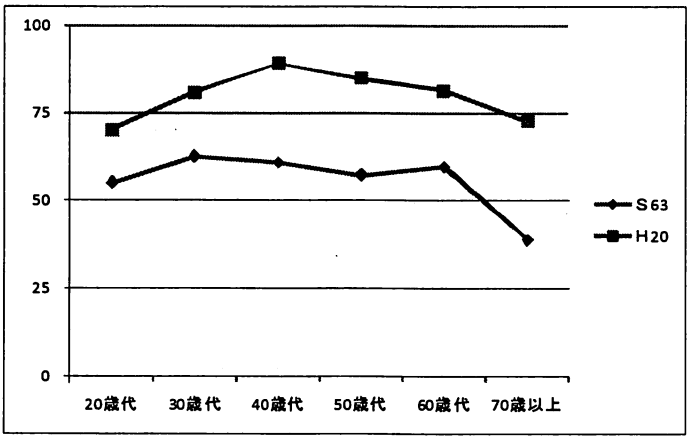
S63:「あなたは，生涯学習または生涯教育という言葉を聞いたことがありますか，ありませんか。」で「聞いたことがある」の比率。

H4 および H11:「あなたは，「生涯学習」という言葉を聞いたことがありますか，ありませんか。」で「聞いたことがある」の比率。

H17:「あなたは，「生涯学習」という言葉を聞いたことがありますか。」で「聞いたことがある」の比率。

H20:「あなたは，「生涯学習」という言葉を聞いたことがありますか。」で「ある」の比率。

第1図　年齢別にみた「生涯学習」の周知率－S63とH20の比較－



70%台から80%台の間に入っている。またS63からH20の間の変化については70歳以上が最も上昇しており，33.8ポイント上昇している（第1表・第1図参照）。

（2）学習率の経年変化

学習率にはさまざまな捉え方があるが，ここでは各調査とも過去1年間に生涯学習を行った人の比率で捉えている(3)。但し，調査によっては質問の仕方が若干異なる。

成人全体では，S63の40.1%からH20の47.2%まで上昇しているが，これにS54の結果も加えて分析すると，S54は31.4%であったので，そこから約30年間で15ポイント以上上昇したことになる。なお，S54には10歳代前半のデータも含まれている。また，S54では，「あなたは，この1年ぐらいの間に仕事や家事，学業のほかに，予定をたて継続して何かを学んだり趣味やスポーツ活動などをしていらっしゃいますか。」で聞いている。

年齢別にみると（第2表参照），S63では20歳代が最も高い比率であったが，H20では50歳代が最も高い比率となっている。50歳代から上は，どの年齢もS63～H20の間に10ポイント以上増加しており，70歳以上はこの20年間で20%台から40%台に達しており最も増加している。一方，20歳代は殆ど変化がなく，S63からH20にかけて僅か0.3ポイントの上昇である。

第2表　年齢別にみた学習率の経年変化

	S63	H4	H11	H17	H20	S63～H20間の比率の増減
全体	40.1	47.5	44.8	47.6	47.2	＋7．1
20歳代	44.4	55.2	46.2	46.4	44.7	＋0．3
30歳代	42.9	51.4	47.1	48.9	48.8	＋5．9
40歳代	43.5	50.6	50.4	51.6	47.9	＋4．4
50歳代	37.8	44.8	45.5	48.0	50.1	＋12．3
60歳代	36.6	45.0	45.2	49.5	48.8	＋12．2
70歳以上	27.7	34.8	32.7	40.1	41.9	＋14．2

(注) 表中の数値は被調査者数を母数とした比率。なお，各調査における学習率の捉え方は次の通り。

S63：「あなたはこの１年間に，仕事や家事，学業のほかに一定の期間継続して学んだり，習ったりしていますか，それともしたことがありますか。あればいくつでもあげてください。」で「特にない」と「わからない」を除いた比率。

H4：「「生涯学習」というのは，一人一人が，自分の人生を楽しく豊かにするために，生涯のいろいろな時期に，自分から進んで行う学習やスポーツ，文化活動，ボランティア活動，趣味などのさまざまな活動のことをいいます。あなたは，この１年くらいの間に，このような「生涯学習」をしたことがありますか。あるとすれば，それはどのようなものですか。この中からいくつでもあげてください。」で「特にそういうことはしていない」と「わからない」を除いた比率。

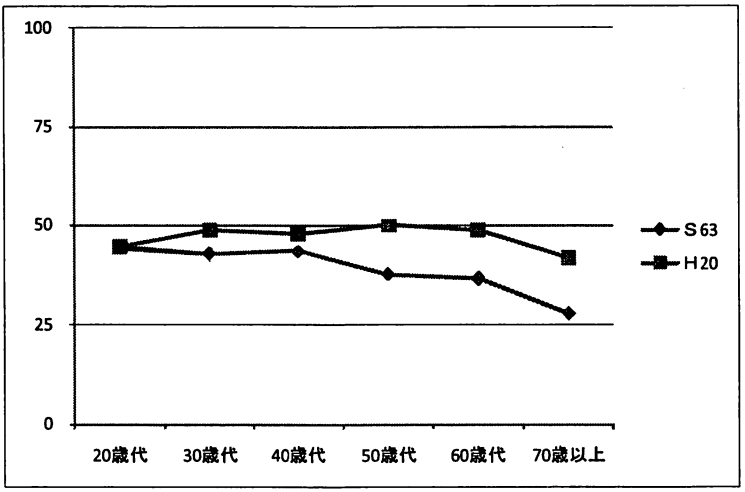
H11：「「生涯学習」とは，一人一人が，自分の人生を楽しく豊かにするために，生涯のいろいろな時期に，自分から進んで行う学習やスポーツ，文化活動，ボランティア活動，趣味などのさまざまな活動のことをいいます。あなたは，この１年くらいの間に，このような「生涯学習」をしたことがありますか。あるとすれば，それはどのようなものですか。この中からいくつでもあげてください。」で「特にそういうことはしていない」と「わからない」を除いた比率。

H17：「（生涯学習のイメージ図を示したカードを提示して，調査対象者によく読んでもらってから，以下の質問を行う。）あなたは，この１年くらいの間に，このような「生涯学習」をしたことがありますか。あるとすれば，どのようなものですか。この中からいくつでもあげてください。」で「特にそういうことはしていない」と「わからない」を除いた比率。

H20：「（生涯学習を説明した資料を調査対象者に見てもらい，調査員が読み上げた上で質問する。）あなたは，この１年くらいの間に，「生涯学習」をしたことがありますか。この中からいくつでもあげてください。」で「（この１年くらい）していない」と「わからない」を除いた比率。

年齢別の傾向については，これまでの研究成果でも既に指摘されており(4)，平成１ケタくらいまでは年齢が上がるとともに学習率が下がるというのが学習率の一般的傾向であったが，平成２ケタに入る頃から20歳代の学習率が落ち込みほぼ横ばいか，あるいは50，60歳代くらいまで年齢が上がるにつれて学習率も上昇する傾向へと変わりつつある（第２図参照）。

第２図　年齢別にみた学習率－Ｓ63とＨ20の比較－



（３）　学習希望率の経年変化

ここでいう学習希望率とは，各調査時点で何らかの学習活動を行うことを希望する人の比率である。学習希望率に関するこれまでの研究成果によると，成人全体の学習希望率は平成期に入るまでは60%から75%へ上昇しながら推移しており，特に60歳代を中心とする高齢者の学習希望率の上昇が著しい(5)。今回の分析でも，Ｓ63の成人全体の学習希望率は77.6%まで達しているが，その後，平成期に入ってから60%台の中で下降しながら推移している。但し，直近のＨ20では70%台に再び上昇している（第３表参照）。

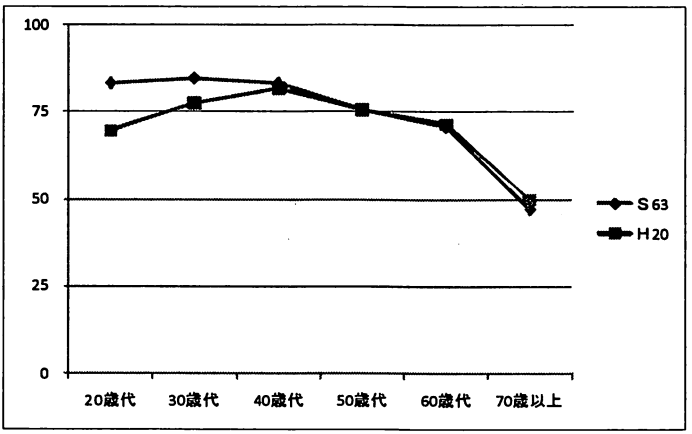
年齢別では（第３表参照），Ｓ63では30歳代をピークに20～40歳代が80%台の比率となっており，ここが最も学習希望率の高い年齢層であった。しかしＨ20になると40歳代が80%台で最も高く，次いで高いのが30歳代，50歳代となっており，学習希望率の高い年齢層が上がってきている。一方，20歳代のＨ20における学習希望率はＳ63から10ポイント以上低下しており，全体でみれば学習希望率の低い方の年齢層になっている。また60歳代と70歳以上は，Ｓ63よりもＨ20の方が若干高い比率となっている（第３図参照）。

第３表　年齢別にみた学習希望率の経年変化

	S63	H4	H11	H17	H20	S63～H20間の比率の増減
全体	77.6	65.9	64.0	64.0	70.5	−7．1
20歳代	83.3	70.4	65.9	61.6	69.6	−13．7
30歳代	84.7	74.3	74.2	69.7	77.6	−7．1
40歳代	83.2	70.1	72.9	73.5	81.8	−1．4
50歳代	75.5	68.8	69.8	71.7	75.5	±0
60歳代	70.6	58.8	60.3	61.6	71.5	+0．9
70歳以上	47.3	42.2	37.4	44.5	49.9	+2．6

(注) 表中の数値は被調査者数を母数とした比率。なお，各調査における学習希望率の捉え方は次の通り。
S63：「あなたは，一生を通じていつでも，仕事や日常生活に必要なことを学んだり，スポーツや芸術文化に親しみたいと思いますか，それともそうは思いませんか。」で「そう思う」の比率。
H4 および H11：「あなたは，今後，「生涯学習」をしてみたいと思いますか，それともそうは思いませんか。」で「してみたいと思う」の比率。
H17：「あなたは，今後，「生涯学習」をしてみたいと思いますか。」で「してみたいと思う」の比率。
H20：「あなたは，今後，「生涯学習」をしてみたいと思いますか。」で「してみたいと思う」と「どちらかといえば，してみたいと思う」を合わせた比率。

第３図　年齢別にみた学習希望率－Ｓ63とＨ20の比較－



3．生涯学習普及に関する研究課題

前章の分析結果を要約すると次の2点にまとめられる。

1）成人全体では，「生涯学習」の周知率と学習率は少しずつ上昇している。一方，学習希望率は平成期に入ってから下降傾向にあったが，直近のH20では再び上昇している。

2）年齢別にみると，今回取り上げた3項目とも，年齢が上がるにつれて比率が下がっているというかつての傾向から，20歳代から高齢期に向かって横ばいもしくは徐々に上昇していくという傾向に変化しつつある。

この傾向が今後も続くのかどうか継続的な分析を行うことも今後の研究課題の1つであろうが，ここでは生涯学習普及の別の側面を捉えるための研究課題として，(1)今回取り上げた3項目間の比率のギャップ，(2)世代別の比率の推移について検討してみることにしよう。

（1）「生涯学習」の周知率，学習率，学習希望率のギャップの検討

1）学習希望率と学習率のギャップ

学習希望率と学習率の間にギャップがあるということは，学習活動を希望しているにもかかわらず何らかの理由で学習活動を行っていない人がいるということで，このことは生涯学習普及への別の示唆を与える実態の1つであると考えられる。もちろん学習活動を希望していなくても実際に学習活動を行っている人もいる可能性があるので，学習希望率と学習率のギャップを単純に捉えることはできない。したがって，ここでは大まかな傾向として捉えておく必要がある。

このギャップについて，昭和40年代後半～50年代前半に実施された調査結果を分析した研究によれば[6]，成人全体における学習希望率と学習率のギャップは約10ポイント（10%の比率差）であったが，S63では40ポイント近くまで拡がり，平成期に入って学習希望率の低下とともに20ポイントを下回る値を推移していたが，H20になって20ポイント以上になっている（第4表参照）。

また年齢別では，かつては若年層の方が高齢層よりギャップが大きいと指

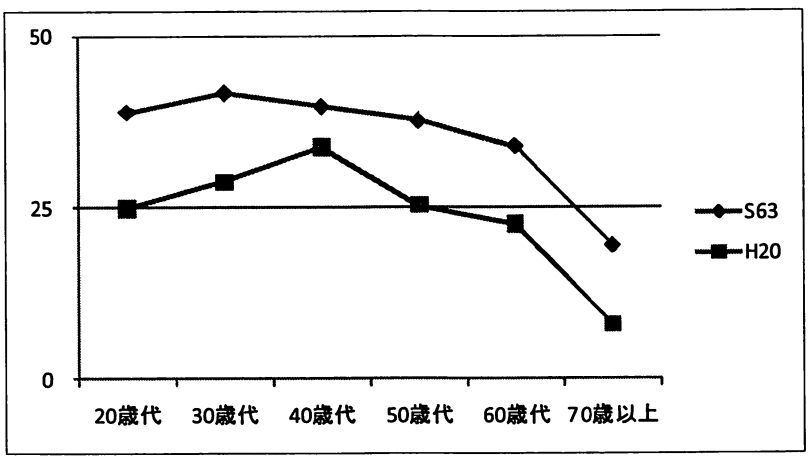
摘されており[7]，S63もその傾向が見られたが，H20では40歳代が最もギャップの大きい年齢になっている（第4図参照）。

第4表　学習希望率と学習率のギャップの経年変化（年齢別）

	S63	H4	H11	H17	H20
全体	37.5	18.4	19.2	16.4	23.3
20歳代	38.9	15.2	19.7	15.2	24.9
30歳代	41.8	22.9	27.1	20.8	28.8
40歳代	39.7	19.5	22.5	21.9	33.9
50歳代	37.7	24.0	24.3	23.7	25.4
60歳代	34.0	13.8	15.1	12.1	22.7
70歳以上	19.6	7.4	4.7	4.4	8.0

（注）表中の数値は，学習希望率から学習率を引いた値である。

第4図　学習希望率と学習率のギャップ－S63とH20の比較－



2）「生涯学習」の周知率と学習率のギャップ

次に「生涯学習」の周知率と学習率のギャップについて，これも「生涯学習」という言葉を知らなくても実際に学習活動を行っている人がいる可能性

はあるが，差し当たり単純なギャップを検討してみると（第５表参照），成人全体ではＳ63では10ポイント台からＨ20では30ポイント以上に拡がり，ポイントが約２倍となっている。

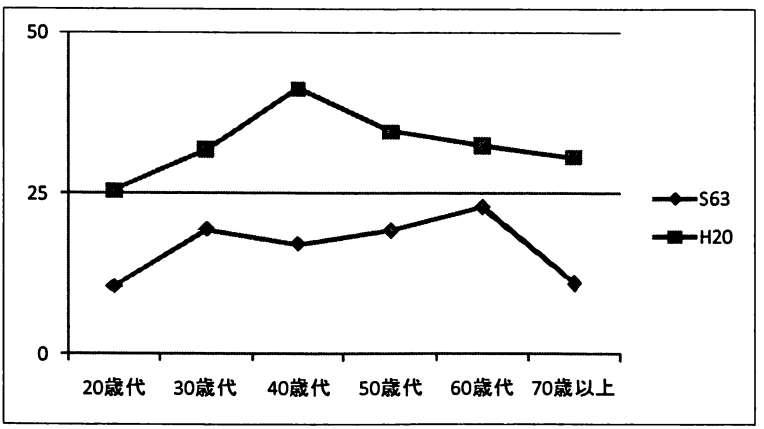
第５表　「生涯学習」の周知率と学習率のギャップの経年変化（年齢別）

	S63	H4	H11	H17	H20
全体	17.9	17.0	29.2	33.1	33.3
20歳代	10.6	0.4	14.4	25.9	25.5
30歳代	19.5	15.7	29.6	32.1	31.9
40歳代	17.2	19.3	34.2	37.4	41.3
50歳代	19.4	24.3	33.7	39.5	34.7
60歳代	23.0	17.4	29.0	32.0	32.6
70歳以上	11.1	16.7	27.9	27.8	30.7

（注）表中の数値は，「生涯学習」の周知率から学習率を引いた値である。

年齢別では，Ｓ63ではギャップが最も大きい年齢は60歳代であったが，Ｈ20では40歳代の方にピークが移っている（第５図参照）。

第５図　「生涯学習」の周知率と学習率のギャップ－Ｓ63とＨ20の比較－



3）「生涯学習」の周知率と学習希望率のギャップ

「生涯学習」の周知率と学習希望率のギャップについてはどうであろうか。成人全体ではS63およびH4で「生涯学習」の周知率よりも学習希望率の方が高いため，ギャップはマイナスの値となっている。それ以降は「生涯学習」周知率の方が高くなり，H20では10ポイントのギャップとなっている(第6表参照)。S63では学習希望に関する質問の仕方が他の調査と異なっており，そのため学習活動を幅広く捉え学習希望率が高くなっている可能性もあろうが，平成初期までは「生涯学習」の用語よりも学習希望の意識が先行しており，その後，用語が徐々に浸透していったことが予想される。

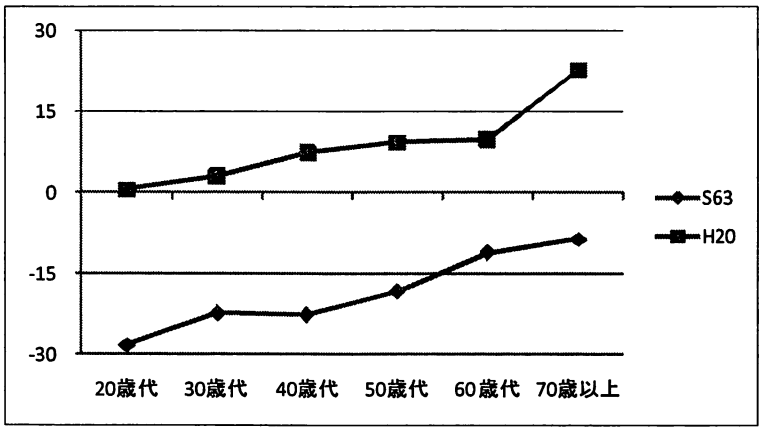
年齢別については，年齢が上がるにつれてギャップが拡がっていくという傾向が見られ，この傾向はS63もH20もほぼ同様である（第6図参照)。またH20の20歳代におけるギャップは殆ど無く，今後もこのような傾向が続くのか注視する必要があろう。

第6表　「生涯学習」の周知率と学習希望率のギャップの経年変化（年齢別）

	S63	H4	H11	H17	H20
全体	-19.6	-1.4	10.0	16.7	10.0
20歳代	-28.3	-14.8	-5.3	10.7	0.6
30歳代	-22.3	-7.2	2.5	11.3	3.1
40歳代	-22.5	-0.2	11.7	15.5	7.4
50歳代	-18.3	0.3	9.4	15.8	9.3
60歳代	-11.0	3.6	13.9	19.9	9.9
70歳以上	-8.5	9.3	23.2	23.4	22.7

(注)表中の数値は，「生涯学習」の周知率から学習希望率を引いた値である。

第６図「生涯学習」の周知率と学習希望率のギャップ－Ｓ63とＨ20の比較－



（２）世代別の比率の推移の検討

ここで世代別の比率の推移について取り上げるのは，我が国における生涯学習普及のパターンが世代によって異なるのではないかという仮説によるものである。但し，このような分析を行うためにはもう少し何年か先の調査データの蓄積を待たなくてはならないと考えられるので，本格的な分析は今後の課題にし，差し当たりここでは，調査実施時期がほぼ10年間隔となっているＳ63，Ｈ11，Ｈ20の３つの調査データを用いた検討結果を提示することにした。具体的には，被調査者の誕生年を10年ごとに区切って「昭和54～63年（以下，Ｓ54～63)」「昭和44～53年（以下，Ｓ44～53)」「昭和34～43年（以下，Ｓ34～43)」「昭和24～33年（以下，Ｓ24～33)」「昭和14～23年（以下，Ｓ14～23)」「昭和４～13（以下，Ｓ4～13)」「大正８～昭和３（以下，Ｔ8～Ｓ3)」「大正７年以前（以下，Ｔ7以前)」の８世代に分け，各世代が相当する調査データの推移の傾向を捉えてみることにした。

まず「生涯学習」の周知率であるが（第７表参照)，これについては20歳代から30歳代に移る頃に上昇する傾向がある。

「Ｓ44～53生」は，20歳代の時に60.6%であったところ，30歳代になると80.7%と周知率が20ポイント以上上昇している。同じ傾向は「Ｓ34～43」に

も見られ，20歳代の55.0%から30歳代の76.7%に上がり，こちらも20ポイント以上の上昇である。

高齢層では，特に60歳代から70歳以上に移る頃は殆ど変化が無い。つまり，おおよそ60歳代かそれまでのうちに1度は「生涯学習」という言葉を耳にした人が殆どであると考えられる。

第7表　「生涯学習」の周知率の世代別推移

	S63		→	H10(データはH11)		→	H20	
	年齢	比率		年齢	比率		年齢	比率
S54～63生	－	－	－	－	－	－	20歳代	70.2
S44～53生	－	－	－	20歳代	60.6	＋20．1	30歳代	80.7
S34～43生	20歳代	55.0	＋21．7	30歳代	76.7	＋12．5	40歳代	89.2
S24～33生	30歳代	62.4	＋22．2	40歳代	84.6	＋0．2	50歳代	84.8
S14～23生	40歳代	60.7	＋18．5	50歳代	79.2	＋2．2	60歳代	81.4
S4～13生	50歳代	57.2	＋17．0	60歳代	74.2	－1．6	70歳以上	72.6
T8～S3生	60歳代	59.6	＋1．0	70歳以上	60.6	－	－	－
T7以前生	70歳以上	38.8	－	－	－	－	－	－

(注) 表中の「比率」欄の数値は被調査者数を母数とした「生涯学習」の周知率で，「→」欄の数値は前後の調査における比率の増減を示す。なお，－は該当するデータが無いことを示す。

学習率は（第8表参照），60歳代から70歳以上に移る間に僅かに下がる傾向が見られるが，他はほぼ横ばいまたは若干の上昇である。特に「S24～33生」では，50%近くまでは学習率は上がり続け，50%前後に達すると緩やかに下がる傾向が見られる。今後は，最も若年層の「S54～63生」（H20で20歳代）も上の世代と同じような推移パターンとなるかどうか注目していく必要があろう。

第8表　学習率の世代別推移

	S63		→	H10(データはH11)		→	H20	
	年齢	比率		年齢	比率		年齢	比率
S54～63生	—	—	—	—	—	—	20歳代	44.7
S44～53生	—	—	—	20歳代	46.2	+2.6	30歳代	48.8
S34～43生	20歳代	44.4	+2.7	30歳代	47.1	+0.8	40歳代	47.9
S24～33生	30歳代	42.9	+7.5	40歳代	50.4	−0.3	50歳代	50.1
S14～23生	40歳代	43.5	+2.0	50歳代	45.5	+3.3	60歳代	48.8
S4～13生	50歳代	37.8	+7.4	60歳代	45.2	−3.3	70歳以上	41.9
T8～S3生	60歳代	36.6	−3.9	70歳以上	32.7	—	—	—
T7以前生	70歳以上	27.7	—	—	—	—	—	—

(注) 表中の「比率」欄の数値は被調査者数を母数とした学習率で，「→」欄の数値は前後の調査における比率の増減を示す。なお，—は該当するデータが無いことを示す。

学習希望率に関しては（第9表参照），「S4～13生」や「T8～S3生」の高齢層はS63から大幅に下がっている。「S34～43生」「S24～33生」「S14～23生」も，S63から10年後のH10（データはH11）までは10ポイント前後下がっているが，その後のH20までの10年間では少し上昇している。学習希望は意識であるため当時の社会的状況等に左右されやすいとも考えられ，今後はその観点からの分析を進めていく必要もあろう[8]。

第9表　学習希望率の世代別推移

	S63		→	H10(データはH11)		→	H20	
	年齢	比率		年齢	比率		年齢	比率
S54～63生	—	—	—	—	—	—	20歳代	69.6
S44～53生	—	—	—	20歳代	65.9	+11.7	30歳代	77.6
S34～43生	20歳代	83.3	−9.1	30歳代	74.2	+7.6	40歳代	81.8
S24～33生	30歳代	84.7	−11.8	40歳代	72.9	+2.6	50歳代	75.5
S14～23生	40歳代	83.2	−13.4	50歳代	69.8	+1.7	60歳代	71.5
S4～13生	50歳代	75.5	−15.2	60歳代	60.3	−10.4	70歳以上	49.9
T8～S3生	60歳代	70.6	−33.2	70歳以上	37.4	—	—	—
T7以前生	70歳以上	47.3	—	—	—	—	—	—

(注) 表中の「比率」欄の数値は被調査者数を母数とした学習希望率で，「→」欄の数値は前後の調査における比率の増減を示す。なお，—は該当するデータが無いことを示す。

4．おわりに

生涯学習普及の動向をさらに詳しく摑んでいくためには，学習率や学習希望率にかかわる具体的な学習内容，学習方法・形態等の経年分析を行っていく必要もあろうが，今回は紙幅の関係上そこまでは取り上げられなかった。また，生涯学習社会実現のための課題との関係で述べれば(9)，学習成果の評価に関する意見や学習活動におけるICT活用などの分析も重要になってくるように思われる。これらについては調査データの蓄積をもう少し待つ必要もあるが，今後の課題の1つであろう。

注

(1)　各調査の概要については付表1を参照。なお，今回は20歳以上の成人の傾向を捉えるため，H17については20歳以上のデータ（有効回収数3,339人）のみを用いている。

付表1　『生涯学習に関する世論調査』概要

	実施時期	母集団	標本数	有効回収数
S54	昭和54年2月	全国15歳以上の者	5,000人	4,012人
S63	昭和63年9月	全国20歳以上の者	5,000人	3,863人
H4	平成4年2月	全国20歳以上の者	3,000人	2,191人
H11	平成11年12月	全国20歳以上の者	5,000人	3,448人
H17	平成17年5～6月	全国15歳以上の者	5,000人	3,489人
H20	平成20年5～6月	全国20歳以上の者	3,000人	1,837人

(注)S54の調査名は『生涯教育に関する世論調査』である。

(2)　本学会関係で発表された研究成果については下記の通り。

・浅井経子「成人の学習行動－生活行動との関係について－」(『日本生涯教育学会年報』第1号，昭和55年，pp.257-272)。

・辻功・山本恒夫・浅井経子・水谷修「成人の学習可能性」(『日本生涯教育学会年報』第2号，昭和56年，pp.201-229)。

・浅井経子「生涯学習の構造」(岡本包治・山本恒夫編著『生涯教育とは何か－課

題から実践へ－』ぎょうせい，昭和60年，pp. 185-222)。

・浅井経子「データでみる日本の生涯教育」(岡本包治・山本恒夫編『生涯教育データバンク』ぎょうせい，昭和60年，pp. 1-217)。

・浅井経子「学習希望率，学習内容，方法・形態別ニーズの変化と学習機会の整備」(『日本生涯教育学会年報』第18号，平成9年，pp. 47-59)。

・浅井経子「成人の学習行動と学習ニーズ」(日本生涯教育学会『生涯学習研究 e 事典』http://ejiten.javea.or.jp/，平成18年12月14日公開)。

(3)　生涯学習を，生涯を通じて一定の活動により考え方（意識）や行動の仕方（行動様式）を変容する過程（山本恒夫「生涯学習の概念」(日本生涯教育学会『生涯学習研究 e 事典』http://ejiten.javea.or.jp/，平成17年9月14日公開)，山本恒夫『21世紀生涯学習への招待』(協同出版，平成13年）などを参照）と定義すれば，今回の調査で取り上げられている各項目の殆どはどちらかと言えば上述の「一定の活動」のことであるから，厳密に言えばここでは‘学習活動率’と呼ぶ方がふさわしい。しかし，各調査で一般的に用いられる‘学習率’をここでも使用することにしたい。

(4)　浅井経子「データでみる日本の生涯教育」(前掲)，浅井経子「成人の学習行動と学習ニーズ」(前掲）などを参照。

(5)　浅井経子「学習希望率，学習内容，方法・形態別ニーズの変化と学習機会の整備」（前掲）などを参照。

(6)　辻功他・前掲論文を参照。

(7)　同上。

(8)　浅井経子「成人の学習と社会の変化－平成期を中心に－」(『八洲学園大学紀要』創刊号，平成17年，pp. 41-49）では，平成期の成人の学習実態や学習ニーズを社会の変化とのかかわりからの分析を行っている。

(9)　拙稿「生涯学習関係答申の動向と課題－平成17年まで－」(日本生涯教育学会『生涯学習研究 e 事典』http://ejiten.javea.or.jp/，平成18年1月27日公開）などを参照。